

令和元年度自己評価シート(中間評価)

校番	202	学校名	広島県立広島叡智学園中学校	校長氏名	林 史	全・定・通	本・分
----	-----	-----	---------------	------	-----	-------	-----

学校経営目標					
	達成目標	本年度行動計画	評価	理由	担当部等
1 社会の持続的な平和と発展に向け、世界中のどこにおいても地域や世界の「よりよい未来」を創造できるリーダーを育成する学校					
	生徒が自己や集団の課題を自ら発見・解決し、集団としてより良い方向に進もうとする姿勢やリーダー性を身につけている。	学年班長会を組織し、適宜フィードバックを行いながらリーダー性を育むための生徒支援を行う。	B	それぞれの学級の取組の中で班長を中心に行ったことはあるが、学年班長会として機能させることができていない。	学年
	グローバル社会の諸課題に対応できる資質を育成するために、地域の課題や世界的な問題の発見・解決に取り組み、それをバイリンガルで発信することができる。	地域との交流やフィールドワークの機会を設定し、生徒が相互に協働しながら課題解決へと行動していくプロジェクト学習のカリキュラムを設計・実施する。さらに、その学習成果をバイリンガルで発表する場を設定し成果を共有する。	B	上半期において、授業内における地域住民との交流、地域におけるインタビューの実施、地域住民を招いた発表会の開催を通して、地域と密に連携を取りながらプログラムを実施した。全8グループが学習成果を披露することができたが、バイリンガルでの発表とはなっていない。	教務
	一人一人の生徒が自己実現に向けたプロセスを理解している。	将来設計のためのワークショップ等を継続するとともに、未来創造科と連携を図りながら Personal Project に向けた準備を行う。	B	外部講師によるドリームマップに係るワークショップを開催した。 進路希望調査を実施し、学年集団の特徴を把握し、後期の進路ワークショップの計画に繋げた。	進路指導
	生徒が、自分の考えや思いを英語で表現・議論できる高い英語運用能力を有している。	授業及び放課後活動等を計画的に実施するとともに、生徒の英語運用能力の定着状況についてこまめに把握する。	B	習熟度別による個に応じた授業を展開した。 放課後活動ではオンライン英会話と多読を計画通り実施した。	進路指導

【評価結果の分析】

- ・生徒の日程、時程の過密さから学年班長会を設ける場面を設定することが難しい。また、委員会活動との役割の整理等も含めて改善していく必要がある。(学年)
- ・「総合的な学習の時間」である「未来創造科」の授業において、当初計画通り、地域へのフィールドワークを実施しながらプロジェクト学習を実施できている。ただし、これまでの学習活動では、地域の方々を対象とした活動が中心であったため、また、生徒の現段階の英語力の実態から日本語中心の発信とした。(教務)
- ・進路ワークショップへの生徒の関心・意欲は高く、前向きな進路を描くことができているが、学習時間調査等から進路実現に向けての学習習慣確立に課題がみられる。(進路指導)
- ・生徒の実態を綿密に把握し、実態に応じた学習活動が提供できるように取り組んでいる。(進路指導)

【今後の改善方策】

- ・学年班長会を月に1回、行事予定の中に組み込み、実施していく仕組みを整える。また、学年班長会を通して、直近の学年の課題を具体的に捉え、それに対する取り組みを考え実践させる。(学年)
- ・今後も計画に沿って学習プログラムを進めていながら、「バイリンガル発信」も念頭に置きつつ、学習成果をまとめていくよう指導する。その際、地域の方々を対象とした学習成果発表会では、従来通り日本語で行いつつ、「バイリンガルによる発信」については、学校 HP 上に、バイリンガルによるレポートを掲載する、学習成果発表の様子を動画に編集してバイリンガルでアップするなど、多様な発信方法を検討していく中で指導を行っていく。(教務)
- ・生徒の進路意識をさらに高めるため、外務省講師によるODA出前講座等を企画し、世界の今を知る機会を与える。(進路指導)
- ・進路指導の方向性を「学習習慣の定着」、「自分の進路を考える」、「自分の力を知る」、「自分の力をためす」の4つの観点で具体化し、「自分の力を知る」では外部テストの導入を検討、また、「自分の力をためす」ではケンブリッジ英検の実施に取りかかる。(進路指導)

2 「学びの変革」の目指すべきモデルとなる学校				
生徒が自己の目標を明確にして、粘り強く主体的に学習に取り組もうとしている。	育成したい学習者像について、教員及び生徒間でその具体的な姿を共有する。日々の学習活動のなかで生徒がその学習者像を自らの学びの姿勢として体現できる場面を設定するとともに、教員がその達成に向けて学習指導方法の工夫及び支援を行う。	B	10の学習者像のうち7項目で生徒の自己評価が3.5以上となっている。残り3項目についてはわずかに下回っている。	教務
全ての教科において概念理解を深める質の高い授業が展開されている。	全ての教科が、概念理解を深めるための探究的な学習活動を展開する。	B	探究的な学習はすべての教科の中で意識して取り組んでいる。81%の生徒が肯定的な自己評価をしている。	教務
地域等に関わった学校を目指し、ローカル・グローバルの両視点から教育活動が展開されている。	日常的に地域の人々と連携・協働してプロジェクト型学習に取り組むことができる学習プログラムを設計・実施する。	B	授業において、「地域の高校生との学び合い」、「地域住民と生徒が地域に関する情報の交換」や「学習成果物を地域の施設に展示する活動」を学習プログラム内に組み込み、実施した。	教務 管理職

【評価結果の分析】

・「生徒の自主的・主体的な学習」に関する項目では、IBの「10の学習者像」に関するアンケートから、「知識のある人(平均値3.4、以下同じ)」「バランスの取れた人(3.475)」「信念のある人(3.3)」の3項目が、目標指標として掲げていた「3.5」を下回る結果となったが、その一方で「コミュニケーションが取れる人(4.2)」「思いやりのある人(4.0)」「考え人(4.4)」の3項目は「4.0」を上回る結果となった。生徒の入学後4か月弱が経過した段階でのアンケート結果ではあるが、まずまずの数値であるといえる。(教務)

・「概念理解を深める学習活動」に関する項目では、目標として掲げていた「肯定的回答の割合」の数値「80%」に対して、「81%」となり、まずまずの成果を示すことができたといえる。(教務)

・「地域連携」に関する項目では、未来創造科の授業においては、当初の学習計画に沿って、地域の方々との連携を取り入れた学習活動の展開ができており、計画に沿った学習プログラムを順調に展開できているといえる。その他の各教科については、地域との連携をとり入れた学習活動の実践については未実施である。(教務/管理職)

【今後の改善方策】

・「生徒の自主的・主体的な学習」に関しては、引き続き各授業・各単元において「10の学習者像」との関連性を意識できる場面を設定できるよう各教科に働きかけていくとともに、教員及び生徒間でその具体像の共有化を進めることができるようにし、年度末には全項目で目標値を上回ることを目指す。(教務)

・「概念理解を深める学習活動」では、現状の取り組みを基本とし、質的にもレベルアップしていくことができる学習活動の展開を、IBチームとの連携を密にすることを通して、全体に促していく。(教務)

・「地域連携」に関する項目では、今後、各教科においても、地域との連携をも視野に収めた学習活動が展開できるよう、単元計画の工夫を促検討していく。(教務/管理職)

3 生徒の自己管理能力を高めるとともに、安心・安全な学習及び生活のための環境を整えた学校				
所属する学級が全ての生徒にとって居心地の良い場となっている。	定期的な個別面談を行うなどで学級や生徒に係る情報の収集に努めるとともに、学級において適宜取り上げながら学級経営を行う。	B	5月29日に実施したQUの結果、学級生活満足群の生徒の割合が53%であった。	学年
様々な場面で活用できる深い知識を身に付けるための学習習慣が確立している。	各教科の学習課題量を調節し、生徒の学習意欲の維持・向上を図りながら、個々にとって最適な学習習慣を確立させる。	C	学習時間調査を2週間毎実施し、個々の学習習慣確立に向けて、課題が見られた。	進路指導 学年
生徒自らが学校及び寮生活におけるルールを考え、それを率先して厳守し、主体的に規律ある生活を送っている。	集団生活において守るべきルールや与えられた役割を、自発的にかつ責任をもって実践することができるよう、ユニットタイムを活用して振り返りを実施する。さらに、主体的に考えて行動するための効果的なユニット運営の在り方を構築する。	C	委員会活動やユニット内での役割分担を通して、集団生活や責任について考える力を育成する必要がある。	生徒支援
生徒の食の意識を高めるため、地域の食材を取り入れた食事が定期的に提供されている。	地場産物の仕入れ業者を開拓し、生徒に地域の食材を使った食事やその情報を提供する。	C	業者との話し合いを進めているが、地場産物の使用状況が県の設定した数値よりも低い。	保健

【評価結果の分析】

- ・定期的に個別面談等を実施してきたが、時間の短さなど課題がある。しっかりと話を聞くことができる時間的及び環境的な配慮が必要である。(学年)
- ・学習時間については、週毎のばらつきが大きい。また、特定教科に学習時間が偏る傾向がある。(進路指導/学年)
- ・生徒アンケート調査の項目「ユニットで任された仕事を、責任をもって取り組んでいる」において、肯定的評価の割合が81%であった。また、「ユニットタイムでは、ユニット内の課題について、ユニットメンバーと協力して解決に取り組んでいる」において、肯定的評価の割合が80%であったが、生徒の意識と実態にはギャップがある。Hyper-QU テストの項目「自分の係の仕事は、最後までやりとげている」において、肯定的評価の割合が67.5%であった。(生徒支援)
- ・広島県教育委員会が実施する「学校給食における地場産物等の使用状況調査」の第1回調査(令和元年6月10日～14日第3週実施)における本校の状況は、国産の食材使用率は55.9%、そのうち、地場産物の使用率は11.8%であった。(生徒支援)
※地場産物とは、広島県内で収穫された産物、国産食材とは、日本国内で収穫された産物を指す。

【今後の改善方策】

- ・面談だけではなく毎週末にはリフレクションを書かせることによって、生徒の声を拾い上げていく場面を増やしていく。(学年)
- ・教員一人当たりの面談担当の生徒数を軽減し、しっかりと話を聞いていくことのできる環境を整える。また、学習時間の定着に向け、生徒の学習状況を各教科で共有するとともに、教科代表者会議で課題の調整を行う。(進路指導/学年)
- ・委員会活動への働きかけを継続して行うことで、主体性や自主自律を確立させるとともに、来年度以降の生徒会自治活動へとつなげる。また、「自主自律」を確立させるために、教育寮から生活寮へとコンセプトを変更し、寮則を守らせ、生徒の規範意識を醸成する。(生徒支援)
- ・県が目指している地場産物の使用目標は40%であるが、本校の調査結果を提示しながら、業者との交渉を継続していく。また、県の目標に近づけるよう、食材ルートの拡大を進める。(生徒支援)

4 教職員がワークライフバランスを意識し自らの働き方を見直すことで、生徒に対する質の高い教育活動を提供し続ける学校				
教職員自らが適切な時間管理を行うことで、教職員個々の時間外における勤務が縮減している。	校務運営会議及び職員会議等を活用し、働き方に係る指導・助言を行うことで、組織的な業務遂行及びタイムマネジメントの必要性についての意識の向上に努める。また、細かな声掛けにより定時退校の確実な実施を進める。	C	全寮制で24時間体制の学校である。 開校後、様々な生徒対応事案が生起している。 現在は定時退校日での一斉退校も困難な状況である。	管理職
効率的な業務遂行により、教職員の年休取得が推進されている。	様々な機会を捉え年休取得を推進し、働きやすい職場環境づくりを進める。	C	他校にない様々なしくみづくりや授業づくり及び生徒支援体制の確立等、業務が多岐にわたっている。	管理職
教職員が、生徒と向き合う時間が十分確保できている。	学校における業務改善を進め、生徒と向き合う時間及び自己研鑽に係る時間の確保に努める。	C	生徒の安心安全な学校生活や寮生活のため、生徒と向き合う時間の確保に努めてきた。	管理職

【評価結果の分析】

- ・一月当たりの時間外勤務時間が40時間以下の教職員の割合は、本務者33名(大学院への派遣者、中学校への研修者の2名を除く)中、4月6名(約18%)、5月12名(約36%)、6月11名(約33%)、7月14名(約42%)、8月26名(約78%)であり、8月のみ目標とする60%に達している。(管理職)
- ・本務者33名のうち、年間の年休取得日数が10日以上教職員は6名で、その割合は約18%であり、目標とする60%には達していない。(管理職)
- ・生徒アンケート調査の内容から、教職員が生徒と向き合う時間について不十分であり、生徒の諸課題の解決に向け、より踏み込み、きめ細かく対応していく必要がある。(管理職)

【今後の改善方策】

- ・仕事を一人で抱え込まず、組織的に業務を遂行する体制を一層推進していく。また、時間外勤務の要因を分析し、改善策を検討することで、教職員の負担軽減を図り、時間外勤務の縮減に努めていく。(管理職)
- ・年休取得は、仕事のストレス軽減や効率的な業務遂行、モチベーション向上に繋がる。引き続き、組織的な業務の遂行、業務進捗管理を推進し、学校行事等にも配慮しながら教職員が年次休暇を取得しやすい環境づくりに努めていく。(管理職)
- ・開校以降、様々な生徒対応事案が生起しており、学校として生徒と向き合うための十分な時間を確保し、安心安全な学校づくりに取り組んでいく。(管理職)